日高　普　著

再生産表式論

有　斐　閣

〈著者紹介〉

日高普（ひだか ひろし）

1923年生れ。
1950年，東京大学文学部卒業。
現在，法政大学経済学部教授，経済学博士。

〔主要著書〕

『全訂 経済原論』（時潮社，1964，全訂版，1974），『経済学』（岩波全書，1974），『社会科学入門』（有斐閣新書，1980）。
『地代論研究』（時潮社，1962），『商業信用と銀行信用』（青木書店，1966），『銀行資本の理論』（東京大学出版会，1968），『商業資本の理論』（時潮社，1972），『資本の流通過程』（東京大学出版会，1977）。
『精神の風通しのために』（創樹社，1976）。

再生産表式論

昭和56年4月10日　初版第1刷印刷
昭和56年4月20日　初版第1刷発行

定価3,200円

著者　日高普

発行者　江草忠允（えくさ ただあつ）

発行所　株式会社 有斐閣

東京都千代田区神田神保町2-17
電話東京（264）1311（大代表）
郵便番号〔101〕振替口座東京6-370番
本郷支店〔113〕文京区東京大学正門前
京都支店〔606〕左京区田中門前町44

印刷　藤本綜合印刷株式会社
製本　株式会社高陽堂

© 1981，日高普．Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

3033-063680-8611

はしがき

この書は『資本論』第二巻第三篇で樹立された再生産表式論について、原理論における表式の役割という視点から、総合的、徹底的な検討を試みたものである。

『資本論』の各部分を研究した著書や論文は、わが国だけをとっても驚くばかりに厖大な量に達しているであろう。『資本論』の各部分のうちでは、特に多くの研究が集中しているところもあれば、顧みられることの比較的少ないところもある。ここに取り上げた再生産表式論は、そのうちで最もとはいえないとしても、きわめて論ぜられることの多いものといってよかろう。再生産表式を論じた著書や論文は、意外なほど多くの量に達しているのである。それなのにあえてここに一書をつけ加えようとするのには、理由がある。

それは、これら多くの研究成果の全体にたいして筆者が根本的な不満をもっているからにほかならない。それらの研究に、原理論における表式の役割という視点が十分生かされていなかったのではないか、という疑いを禁じえないのだ。そのため表式についての論議がひどく片よってしまったのではあるまいか。以上が新しくこの一書をつけ加えたゆえんなのであるが、そうした意図がどの程度達成されたか否かは、読者諸賢の御叱正を俟つほかはない。

筆者が『資本論』の研究を始めて以来、すでに『地代論研究』『商業信用と銀行信用』『銀行資本の理論』『商業資本の理論』『資本の流通過程』を発表し、本書が六冊目になる。原理論の体系としてみれば、この六冊目でやっと折り返し点をすぎることになったという感じがある。ここまで来れば、筆者に残された人生にもはや他の選択肢は残さ

れていないようだ。哀れなロシナンテに鞭打っておぼつかない歩みを続けるよりほかになさそうである。

本書は、法政大学経済学会『経済志林』に発表された八篇の論文と、大内力先生還暦記念論文集である大谷・斎藤・戸原・日高編『マルクス経済学　理論と実証』(東京大学出版会)に発表した一論文を、全面的に書き直したものである。筆者の学問を導いて下さった今は亡き宇野弘蔵先生、現在でも懇切な御指導をいただいている大内力先生、および本書の出版についてさまざまな努力を惜しまれなかった有斐閣の伊藤真介君に厚い感謝を捧げる次第である。

一九八一年二月

日高　普

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一篇　再生産表式論への導入 …… 1

I　『資本論』の表式論導入 …… 2

1　総資本の流通過程を考える理由　2
2　資本の再生産過程という捉え方　9
3　第二節のちぐはぐさとその原因　17
4　ざっと第一九章の学説史をみて　22
5　個別資本から総資本への移り方　29
6　単純再生産の抽象と二部門分割　35
7　表式で回転期間をどう考えるか　42

II　そのほかの表式論導入 …… 50

8　宇野氏の要約的導入の不明瞭さ　50
9　表式と蓄積過程論のほかの部分　57
10　蓄積と剰余価値分割の前後関係　64

11 全書『原論』のここでの簡略化 72
12 後退している鈴木編『原理論』 77

第二篇　単純再生産表式

I 一般化の問題……86
1 必需品と奢侈品の例が示すもの 86
2 マルクスの数量的抽象力の限界 93
II 貨幣材料の問題……101
3 表式で固定資本を処理する方式 101
4 貨幣材料の再生産を論ずる前に 107
5 貨幣材料再生産の表式化の試み 114
6 宇野氏の表式化成功と蓄蔵問題 120
7 拡張再生産表式への移行の陥穽 128
8 表式と貨幣材料論との不適合性 132
9 批判の仕方に関する教訓的一例 139
10 『原理論』の工夫の長所と短所 146

第三篇　拡張再生産表式 …… 153

I　二つの理論の問題 …… 154

1　まず貨幣量の処理に注目しよう　154
2　拡張再生産表式への移行の検討　161
3　第一、二節の区分のわからなさ　164
4　第三節前文から第四節に至る線　170
5　やっと拡張再生産表式の本論に　177

II　需要の問題 …… 188

6　ルクセンブルクの提起したもの　188
7　表式のもつ抽象性を無視すると　196
8　非資本主義社会との交渉の問題　203
9　ナロードニキとレーニンの対立　211
10　破綻を避けたレーニンへの疑問　217

第四篇　価値法則との関連 …… 225

1　価値法則はどこで論証できるか　226
2　単純再生産表式と等労働量交換　232

第一篇　再生産表式論への導入

I　『資本論』の表式論導入

1　総資本の流通過程を考える理由

再生産表式を説いているのは、いうまでもなく『資本論』第二巻第三篇の「社会的総資本の再生産と流通」である。この篇は第一八章から第二一章までの四章からなり、冒頭の第一八章「緒論」は、当然のことながら再生産表式論の導入部に当たっている。それは第一節「研究の対象」と第二節「貨幣資本の役割」に分かれる。四つの章が、第一八章の導入部、第一九章の学説史、第二〇章の単純再生産表式、第二一章の拡張再生産表式というわかりやすい構成をとっているなかで、最初の第一八章の導入部に、「研究の対象」のほか、それと独立してなぜ「貨幣資本の役割」と題される第二節がおかれているのかという疑問が生ずるが、その前にまず第一節「研究の対象」の検討にはいろう。

マルクスは「資本の再生産過程」という概念を、次のようにして登場させる。「資本の再生産過程は、この直接的生産過程とともに本来の流通過程の両段階をも包括している。つまり一定の周期でたえず新しくくり返されるような周期的な過程として、資本の回転を形成する全循環を包括するのである。」[1] 直接的生産過程と「本来の流通過程」を

包括した周期的過程が、資本の再生産過程だというのだ。W…P…W′の過程とW′—G′・G—Wの過程とを包括すればW…P…W′—G′・G—Wとなる。どこから始まってどこで終わるかはどうでもよい。マルクスもすぐ続いて「いまこの循環をG…G′という形式で考察しても、P…Pという形式で考察しても」といっているように、W…P…W′—G′・G—Wは、G—W…P…W′—G′でもよいし、P…W′—G′・G—W…Pでも、生産過程と流通過程とを包括するならよいわけである。つまり個別資本の一循環（それは当然くり返すという意味を含んでいる）が資本の再生産過程だというわけだ。そうすると資本の循環というのも、資本の回転というのも、資本の再生産過程というのも、きわめて似たものになる。かれによれば資本の再生産過程は「資本の回転を形成する全循環を包括するのである」というのだが、「包括する」といっても、それ以外の何かを含めて一部分として包括するのではないから、イコールというに近い。「全循環」というのも、循環の部分ではなしに全体というほどの意味だから、一循環といっても同じことである。資本の再生産過程とイコールに近くおかれているこの一循環が「資本の回転を形成する」というのだが、資本の循環が資本の回転を「形成」しているのであろうか。資本の回転という概念は、資本が貨幣として投下されてから貨幣として回収されるまでの姿態変換運動を、期間とか速さとかの視点から捉えたものだということは、すでに別の機会に明らかにしたことがある。(2) 資本の循環の方はそれとちがって、資本の円環状にくり返される姿態変換運動を、ある姿態に始まってからその姿態に戻るまでという形式の側面から捉えたものであろう。だからここでマルクスが回転とか循環とかいう概念を区別して厳密に用いているとはいえず、このばあい捉え方のちがいとしてみれば「回転を形成する」全循環とはいえない。しかし不正確ながらマルクスのいおうとすることがわからないわけではない。捉え方はともかく捉えられる対象をみれば、G—W…P…W′—G′が回転でもあれば循環でもあり、それが「資本の再生産過程」だというのであろう。

（1）『資本論』（岡崎次郎訳、国民文庫版）第五分冊一五五頁。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（2）日高『資本の流通過程』（東京大学出版会）第二篇を参照されたい。

「資本の再生産過程」というものが資本の生産過程と資本の流通過程の統一であるかぎり、個別資本の姿態変換運動の一循環でしかない。けれどももしそれだけのことであれば、資本の再生産過程を明らかにするために、再生産表式の展開もこの独立の第三篇をも必要としないであろう。マルクスもまた、そのために第三篇をもうけたのでないことは明らかである。かれはまず、個別資本の循環と同じものとしての資本の再生産過程を個別資本的に説明し、ついでこうのべる。「とはいえ、個々の資本はただ社会的総資本の独立化された、いわば個別的生命を与えられた一断片でしかないのであって、ちょうど個々の資本家がただ資本家階級の一つの個別的要素でしかないのと同様である。社会的資本の運動はそれの独立化された断片である運動の総体、つまり個別資本の回転の総体からなっている。[3]」この最後の「回転の総体」というのを「運動の総体」にした方がよいのではないかと思われるが、そうした細部の表現を別にすれば、ここにのべられていることは正しい。ただ正しいとはいっても、個別資本のことをのべてきてなぜここでにわかに総資本の問題に移らざるをえないかという理由は、ここではまったくふれられていない。そして『資本論』をすでに読了しているわれわれにすれば、この第三篇では社会的総資本の運動をあつかう再生産表式論が中心テーマであることを知っている。するとこの冒頭の個別資本についての「資本の再生産過程」の説明は、総資本の再生産過程をあつかうべきものの導入部におかれているにすぎないことがわかる。事実この第三篇は「社会的総資本の再生産と流通」と題されているのだ。資本の再生産過程は、個別資本のばあいと総資本のばあいと二通り考えられる。第三篇では後者が中心テーマであるが、その導入部で軽く前者にふれたのだ、と一応は考えてよいであろう。

（3）『資本論』前掲一五六頁。

一応はそう考えてよいであろうが、そう考えるとたちまち疑問がおこる。第三篇で総資本の再生産が取りあつかわ

れるのはそれでよいとしても、それでは個別資本の再生産過程はいったいそれまでのどこで中心的に論じられてきたのか。これまで論じられてきた資本の生産過程なり資本の流通過程なりというのは、個別資本のそれであったのか総資本のそれであったのか。こうした疑問にたいして考える手がかりは、この節の中の文章に与えられているようだ。それは「第一巻では資本主義的生産過程が個別的な過程としても再生産過程としても分析された。つまり剰余価値の生産と資本そのものの生産とが分析された。資本が流通部面のなかでおこなう形態変換と素材変換とは、ただ前提されただけでそれ以上に詳論はされなかった」[4]というところと「第一篇でも第二篇でも、問題にされたのはいつでも、ただ一つの個別資本だけであったし、社会的資本の一つの独立化された部分の運動だけであった」[5]というところである。そのうち言葉の意味の点でまず気になるのは、最初の引用文で「個別的な過程としても再生産過程としても」というように「個別的」と「再生産」とが対語になっていることである。これが個別資本的と総資本的の対語になっていればわかりやすいが、そうではない。するとこの「個別的」というのは個別資本のことではなしに、個別的生産過程のことではないかと見当がつく。一つの生産過程としてもくり返される生産過程としても、という意味なのだろうと読んでみて、文意はわかるが、いったいこれは個別資本のそれなのか総資本のそれなのかという疑問は残る。というのはあとの方の引用文では、第二巻の第一、二篇が個別資本のことだと明記されているからだ。この個別資本と総資本の関係が第三篇の導入部を読んでみてきわめて重大な問題であることがわかるが、これをぬきにして資本の再生産過程とは生産過程と流通過程の統一だなどと規定してみても、それがどれほど安易なものにすぎないかは明らかであろう。

（4）『資本論』前掲一五七頁。

（5）同書、一五九頁。

ともかくここでは、第一巻であつかわれるものが個別資本なのか総資本なのか、その点が明記されていないのにたいして、第二巻第一、二篇であつかわれているのが個別資本であることが明記されている。実際、第一篇の初めの四章をしめる資本循環論、とくにその第三、四章が「いつでも、ただ一つの個別資本だけ」をあつかっているかどうかは疑問であるし、そして第一七章という奇妙な部分も問題だ。とはいえこうした問題の部分を別にすれば、総じて第一、二篇が個別資本しかあつかっていない、あるいはすべての資本の代表単数としての個別資本しかあつかっていないということには、異論があるまい。資本の生産過程を論ずるときには、個別資本をあつかうのかそれをうって一丸とした総資本をあつかうのかを明らかにする必要がなく、資本の流通過程を論ずるときには、その区別をどうしても明らかにする必要がでてくる、ということであろうか。どうもマルクスの叙述はそうなっている。そしてそのようなマルクスの考えが正しいのかどうかを考えてみよう。そこで第一巻の第三篇以降第六篇までのところを宇野弘蔵氏の理解[6]にしたがって「資本の生産過程」論とよぶならば、その中心主題は資本が労働者の形成した剰余価値を取得する関係であると要約できよう。それがただ「生産」といわれずに「生産過程」というからには、何らかの経過を意味することは明らかである。その経過とは何か。それはいうまでもなく、産業資本として与えられたG—W…P…W′—G′の全過程のうちW…P…W′の過程、WからW′までの時間的推移を意味するであろう。Wという商品として買い入れた生産要素の姿態をとった資本から出発してW′という商品として売りに出す生産物の姿態をとった資本に至る生産過程において、労働者は生産手段を用いて生産をおこない、生産手段の価値を新生産物に移転するとともに新しく価値を形成し、剰余価値をも形成する。この過程で個々の資本はその資本内部だけでその運動をおこなうことができ、むろん以前の商品の購買を前提し以後の商品の販売を予定するとはいえ、その範囲内では資本は外部との商品関係は結ばない。個々の資本の生産過程は、それぞれ独立の断片なのである。だからその一断片を取り上げたとしても、すべての断片

をうって一丸とした総資本を考えたとしても、内部の仕組みは同じことであり、何の本質的なちがいもない。具体例としてはいうまでもなく個別資本の内部をとるであろうが、理論的にはそれが総資本をひとまとめにしたもののことだと理解しても、何のあやまることもないのである。マルクスが、個別資本に限るとか総資本のことだとか指定しなかったのは、けっしてまちがってはいなかったように思われる。

（6）これについては宇野『経済原論』（岩波書店）および同岩波全書版『経済原論』を参照されたい。

ところが資本の流通過程についてはこれとちがう。個別資本の流通過程はG—W…P…W′—G′のうちのG—WとW′—G′である。これはどうしても個別資本のものでなくてはならない。W′—G′・G—Wの過程はどうしても外部に買い手と売り手を必要とするのであり、すべての個別資本に共通な、代表単数のものである。単数であり外部を必要とするかぎり、他の資本とからみあわざるをえない。ある資本のW′—G′は、そのW′が生産手段となるばあいは買い手の資本のG—Wの一部分となる。またそのW′が生活資料であるばあいは、資本家か労働者に買われるのだが労働者に買われたとしたら、その労働者の労働力を買ってG—Wをおこなった資本家の、G—Wを補完したのである。このようにある資本の流通過程はいやおうなしに他の資本の流通過程とからみあうことになる。だからもし総資本の総生産物をW′として捉えたとしても、そのような総生産物についてW′—G′を考えることはできない。総生産物といってもすべては商品であり、商品であるかぎり売れなければならない、つまり貨幣に換えられなければならない存在である。しかもここではW′のすべてが売れる、貨幣に換えられると考えるのだ。それにもかかわらず、総体としてのW′—G′はない。総商品が売れても総貨幣となるわけではなく、総商品の総価格に応ずる総貨幣となるわけではないからである。総商品W′のうちのある部分と別の部分とが交換され、その交換を媒介するために貨幣はくり返し往復するにすぎないのである。このような事情を考えれば、W′—G′・G—Wがそのままで総資本にあてはまらないことは明らかであろう。G—W…P

…W′—G′もP…W′—G′・G—W…Pも、またW′—G′・G—W…P…W′にしても、あくまで個別資本の循環ではあるがけっして総資本の循環にあてはめることができないのは、それがW′—G′・G—Wという個別資本の流通過程を含んでいるからだ。W…P…W′の生産過程はその点は問題がない。問題は流通過程にある。流通過程は生産過程とちがって、個別資本のそれと総資本のそれとの間には、断絶がある。

このため生産過程を論ずる段階では、個別資本のそれをあつかうばあいと総資本のそれをあつかうばあいの区別を、きちんとつけるのは不可能だ。原理論の同じ分野ではっきりした区別なしにそれを論ずることができるのである。流通過程の方はそうではない。個別資本のそれと総資本のそれとは、むろん前者は後者の一部分でありながら理論的なあつかい方としては異質であり、同様に説くことはできないのである。一方の販売過程は他方の購買過程としてあらわれるのであるから、総資本をうって一丸とした販売過程など考えられるはずもあるまい。総資本の流通過程はもし形式で示すとすればW′…Wとするよりほかにあるまい。W′とWとの間には絶対にG′やGがはいってはならない。もしはいると複雑な流通過程がGをなかにして販売過程と購買過程とにくっきりと分離されてしまうからである。こうして流通過程を論ずるばあいは、個別資本のそれをあつかう段階と総資本のそれをあつかう段階とは、当然異なってこざるをえない。マルクスが第二巻第一、二篇は個別資本の流通過程をあつかうのだと明記したのはまったく正しかった。とすればこの第一、二篇で資本循環論がはいるのはおかしいということになる。資本循環論は、個別資本の考察と総資本の考察とを両方あつかっているのだが、それこそ前者から後者への移行の役割を果たすのである。つまり個別資本の流通過程の考察の限界が示され、必然的に総資本の流通過程の考察に移行せざるをえない論理を展開するものであろう。こうして第三篇では、総資本の流通過程が中心的にあつかわれることになる。

2　資本の再生産過程という捉え方

個別資本の流通過程W′—G′・G—Wは、その資本の内部で処理できるものではない。外部に買い手と売り手を必要とするのであって、そのようなものが存在できるかどうか、その個別資本の立場からは何ともいえない。純粋な流通費用としての売買費の支出も、外部の買い手なり売り手なりを存在させようとする個別資本の努力のあらわれではあるが、個別資本としてできるのはそれまでにすぎない。そこで個別資本としては外部にそうしたものを前提するよりほかにないが、そのような前提が一般に可能なのかどうかが問題とならなくてはならないであろう。外部まで考察のうちにとりこむのであるから、しかもすべての個別資本をそれぞれの外部もふくめてとりこむということになれば、総資本の流通過程の考察ということになる。そして総資本の流通過程の出発点は、総資本の総生産物W′である。個別資本の運動の出発点はいうまでもなく資本として投下された資金Gだ。このGが途中にくる生産過程を媒介手段とすることで、ヨリ多額のG′として還流する。すべての個別資本がそうしたG…G′の運動をおこなうことをつうじて、結果的にはどんな社会にも欠くことのできない物的再生産がおこなわれ、資本主義社会では総商品の再生産としてあらわれる。つまりW′からW′へのくり返し、W′…W′となる。そこで個別資本の流通過程から総資本の流通過程への考察の移行の役割を果たすものは、G…G′からW′…W′への論理的移行をあつかう資本循環論ではあるまいか。こうして再生産表式にはいることが可能となるとともに、またはいらざるをえないことにもなったのである。再生産表式論とは、すなわち総資本の流通過程論にほかならない。いや、総資本の流通過程論は、再生産表式論だけから成りたつのではない。再生産表式は労働者用の生活資料の再生産は表現できても、労働力そのものの再生産は表現できない。そこで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com